

〈論 文〉

「病草紙」にみる日本人の死生観

—なぜ人々は笑っているのか—

植田 美津恵

Abstract *Yamai no Soshi* is a picture scroll compiled during Japan's medieval period. It consists of 21 scenes that portray sick people and those who surround them. Until now, it was conventionally thought that the laughter of those surrounding sick people was the laughter of derision. However, the author wondered whether the laughter depicted in the handscroll should be entirely interpreted in such a manner. Thus, the author selected four of the 21 scenes, examined the facial expressions of those who were laughing and the context in which they were placed, and inferred why they were laughing. In addition, the author analyzed the laughter of the people in the scenes in light of the mentality of ordinary people, the social situation that time as described in *Hojoki* and *Tsurezuregusa*, literary works of the medieval period. The author found that the sense of transience and the outlook on history held by people at the time were closely tied to their view of life and death. Incidentally, a German proverb states, Humor ist, wenn man trotzdem lacht (Humor is to laugh in spite of everything). This proverb suggests that humor generates laughter and that those who truly understand humor laugh in the face of death without being afraid. This is the same kind of laughter observed in *Yamai no Soshi*. This is how people coped with life in the medieval period amid the prevalence of sickness and death. The author came to the conclusion that it is this very view of life and death that we should learn from.

Key words : *Yamai no Soshi*, middle ages, view of life and death, laugh, humor

1. はじめに

病草紙は、平安の終わりに鎌倉時代初期にかけて描かれた絵巻物である^{注1)}。

「地獄草紙」や「餓鬼草紙」と一連の作品であり、六道絵のひとつといわれる。六道とは天道、人道、阿修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道の六つの世界のことで、病草紙はこの中の、人道を描いたものと伝えられる。

作者は不明であるが、後白河院^{注2)}の命を受けて製作されたと考えられている。これまで、この病草紙が描かれた理由や背景、宗教的意味、美術的技巧、現代の医学的診断と照らし合わせた見解など、宗教家や歴史家、美術史家、医学者などによる多方面からの先行研究がある。

六道を描いているといわれつつ、他の草紙と比べて宗教色が薄いことが指摘されてきた一方で、中世絵画史の研究者である山本聡美¹⁾は、病草紙に描かれている病が「正法念処経」^{注3)}に基づくことに着目し、病草紙が経説絵巻の性質を持つことを明らかにした。

また、医学面においては、医師である服部敏良²⁾が病草紙に描かれている病を現代の病

と照らし合せて医学的解釈を説いている。

日本美術史家の加須屋誠³は、製作を命じた後白河院の視点から、「後白河院=見る側」、「描かれる庶民=見られる側」と位置付け、「権力」と「まなざし」の関係性から病草紙を読み解いた。

このように、病草紙をめぐる研究は多岐にわたるが、描かれる側である庶民たちの心情に焦点を当てた論考はほとんどない。病を得た者やその周辺の者たちは、病と裏腹にある死をどのように捉えていたのか。この論文では、病草紙に登場する人々の表情や周囲の反応などを、当時の社会情勢と照らし合わせながら解説を加えていく。特に、病者を笑う人々が登場することが、病草紙の特殊性を示し、悪趣味的な印象を見る者に与える。その笑いは、嘲笑として受け取られることが多いが、果たして、そのすべてが嘲笑なのか、という疑問を呈し、病を得るということの意味や受けとめ方を中世に生きた庶民の立場から読み取ること、平安から鎌倉時代の庶民の「死生観」について論考し、さらに、それらを現代における日本人の「死生観」と比較し、中世人の「死生観」から学ぶべき点を確認していく。

2. 病草紙の概要

2-1. 病草紙に描かれた場面

病草紙は、12世紀後半に後白河院（またはその周辺）の命令によって編まれた絵巻物であり、名古屋の関谷家^{注4)}に伝来した17場面に、その続きとみられる断簡を合わせた21場面が現存し、京都国立博物館・九州国立博物館・サントリー美術館などに「軸装」「卷子装」「台紙貼」^{注5)}の形で分蔵されている（一部個人蔵）。

各場面には、多種多様な症例が表され、全場面のうち20場面には詞書が添えられ、場面の状況についての簡単な解説となっている。症例の一覧を表に示す（表1.）。

絵巻物は、「絵」と「詞書」で構成される。表1.は、場面の名称・現状・概要別に表記し、概要は場面に添えられている詞書を参考にして簡略にまとめた。

表 1. 病草紙場面一覧

名称	現状	概要
①鼻黒の父子	軸装	鼻の先が墨のように黒い男の側に乳飲み子を抱く女がいる。男と同じように鼻の黒いふたりの子が遊んでいる。
②不眠の女	軸装	眠れず「とてもさみしくて心細い」と訴える女と、側にぐっすり眠るふたりの女がいる。
③風病の男	卷子装	瞳が常に揺らいでいる男が碁を打っている。寒さのあまり震えわなないているようだ。それを見て笑いをこらえる二人の女がいる。
④小舌の男	卷子装	舌の根に小さな舌のようなものが生えている男が口を大きく開けている。男の開いた口を指さして診る男。側でもぐさを熱している男がいる。
⑤尻の穴のない男	軸装	尻の穴がなくて口から便を出す男が描かれている。
⑥二形	卷子装	男女の性器を備えている旅人の、性器をさらした寝姿を見て笑う若いふたりの男たちがいる。
⑦眼病治療	卷子装	医師に小刀を突き刺され、眼から出血している男がいる。血を受ける角盥を持つ女、それを見て笑う男女たちが描かれる。
⑧歯の揺らぐ男	卷子装	歯周病のことか。歯が揺らいで物が食べにくいと訴える男。前には山盛りの飯と副菜。側の女がその様子を指さして見ている。
⑨尻の穴あまたある男	卷子装	生まれつき尻の穴が多数ある男が排便している。便が複数の穴から出ている様子を女が見下ろしている。
⑩陰虱の男女	卷子装	毛じらみのため、毛を剃っている男の側で、女が笑みを浮かべながら、しらみ（あるいはその卵）をつまむ仕草をしている。
⑪霍乱の女	卷子装	下痢、吐いて苦しむ女がいる。介抱する老女。すり鉢で何かをすっている女、這う赤子、粥か薬を運ぶ女がいる。
⑫頭のあがらない乞食法師	軸装	背が大きく湾曲しているため、頭が垂れている乞食法師が歩いている。それを見て笑う老人、女、子どもがいる。
⑬息の臭い女	卷子装	優れた容姿でありながら口だけが臭い女が楊枝を使っている。側で指を差して笑う女、臭さに袖で鼻を覆う女がいる。
⑭眠りの男	軸装	すぐに眠ってしまう男と、扇であおぎながら笑う女、眠る男を見て困った顔をする3人の男がいる。

⑮顔にあざのある女	台紙貼	鏡を見ながら、顔のあざを嘆く女。女に指をさす侍女らしき女と袖で顔半分を覆う女がいる。
⑯白子	軸装	顔も髪も白い女が鼓を抱えている。笑う男、女を指さす子ども、驚いて白子の女を見る女、桶を頭に乘せている女がいる。
⑰侏儒	軸装	右手に扇、左手に数珠を持つ極端な低身長 of 男がいる。侏儒僧を見て笑うのは、狩衣姿の男、僧侶、額烏帽子をつけた子どもたちである。
⑱背の曲がった男	台紙貼	背中が弓なりに湾曲しているため、苦し気に歩く乞食法師の男をふたりの子どもが笑っている。
⑲肥満の女	軸装	太りすぎてふたりの侍女に支えられて歩く女がいる。女を見て笑う烏帽子の男、道端に座り幼子に乳を含ませる女がいる。
⑳鶏に目を就かせる女	軸装	(詞書なし) 白衣を着て片膝で座る女。雄鶏が女の目を突いている。
㉑小法師の幻覚を見る男	軸装	持病を持つ男の枕元に、男だけにみえる5寸ほどの法師がたくさんいる。発病した時にだけ見えるという。側には乳を含ませる女と子どもがいる。

【引用文献3.「加須屋 (2017)」参照の上筆者作成】

2-2. 現実的な病・非現実的な病

病草紙には、表1. のように多様な病を患った人と病人を取り巻く人々が描かれる。

現代の医学的所見を参考にこれらの病を読み解く先行研究は数多く存在する。

例えば「小舌」とは、恐らく蝦蟇腫のことであり、舌下腺から分泌される唾液が周囲に貯留し腫瘍ができる病気で、現代では外科的手術の対象である。

「歯の揺らぐ男」は歯周病に罹った様子であり、「頭のあがらない乞食法師」は骨軟化症が由来の骨の変形と思われる。

「二形 (ふたなり)」には、両性具有の人物が描かれている。両性具有とは、染色体異常のために男性性器と女性性器の両方を有している人をいう。加須屋誠は4、「正法念処経」十善業道品の解説から、この病を“不完全な性として生まれることを前世の邪行の報いと捉える仏教的因果応報観の表れ”、と解釈している。しかし原始、人間が人間となる前は両性具有だったとする神話は世界各地に存在し、中世神話の研究者である吉田唯⁵は、中世に編まれた日諱貴本紀には、天照大御神が両性具有として描かれていることを指摘する。

一方、「尻の穴のない男」は生まれつき肛門のない鎖肛と考えられ、現代では乳児期に手術で根治できる先天性疾患である。成人の男で肛門がない状況は考えにくく、他と異なり、明らかに非現実的な絵図であるが、「正法念処経」には肛門が閉じてしまう病の記述があることから、仏教的因果応報の結果として示されている可能性が考えられる。

また、「尻の穴あまたある男」は、逆に多数の肛門がある男が描かれているが、こちらも現実的な描写ではない。が、この時代は痔瘻で苦しむ者が多かったため、痔瘻に苦しむ様子

を誇張して描いたのではないか、との推測がある³。

このように、病草紙には、現代にも見受けられる病と、明らかに非現実的な病が描かれる。

それが何を意図したものかはわからないが、当時の人々は、病そのものが皆、因果応報の結果であるとみなしたのかもしれない。病気の原因をある程度理解している現代の我々からみれば、教説に基づいた病の描写は奇異であり、気味悪く映るものである。

病草紙の総合的研究を行った佐野みどり⁶は、“症例集的な先行作品を基盤にした卑俗な説話的趣味と宗教的契機が結合した作例”と位置付けている。日本宗教史学者の小山聡子⁷は、“後白河法皇の、描写に対する差別視や猟奇的趣味、さらには芸術に対する異常なまでの好奇心によって、はなはだ異色な人道の絵巻物”と見る。

3. 病草紙が描かれた時代

病草紙が描かれた時代は、どのような社会であり、日本史上どんな意味を持つものだろうか。はじめに、でも触れたように本論文では病草紙において、場面に登場する庶民に焦点を当て当時の死生観を浮き彫りにしようという試みである。平安後期から鎌倉にかけての歴史的事件をなぞらせ、同時期に読まれた文学作品を参考に歴史の中で翻弄される庶民の日常について、考察を進めていくこととする。

3-1. 中世の日本

日本史上、歴史的意義があると評される中世の出来事は何かを考えた時、筆者は大きくふたつの重要な事柄を挙げたい。ひとつは、「仏教の伝来と定着」。ふたつめは「貴族から武士の時代へ」である。

① 仏教の伝来と定着

日本に仏教が伝来したのは、百済の聖明王が仏像などを日本に贈った 538 年というのが定説だが、それに先立ち 522 年に漢人司馬達等らが渡来し、仏教を奉じている。

仏教を受け入れることについて、賛成派（崇仏派）の蘇我氏と反対派（排仏派）の物部氏との間に勢力争いをもたらすが、最終的には蘇我氏の勝利に終わる。その後仏教の普及には推古天皇の時代に摂政であった聖徳太子が大きく尽力した。

聖徳太子は、仏教に深く帰依した。十七条憲法の第一条に「和らかなるをもって貴しとなし」、第二条に「熱く三宝を敬ふ。三宝は仏・法・僧なり」と掲げたことから、生きる心構えと拠り所を仏教に求めたことが伺える。

奈良時代は、国家の庇護を受け仏教の発展期を迎えるが、鎮護国家の傾向が強く、いわゆる国家仏教の性格の濃いものであった。国家が、僧の得度・受戒の権限を掌握し、僧侶の生活までも厳しく規制した時代であり、庶民にとって仏教はまだ遠い存在であった。

仏教が庶民に近づいた契機は、伝教大師最澄が天台宗を、弘法大師空海が真言宗を開いた平安時代である。最澄は、それまでの東大寺戒壇における受戒制度に対して、新しく比叡山に独自の大乘戒壇の建立を果たし、これにより旧体制の国家仏教から独立した宗派が成立することとなる。密教である真言宗と密教化された天台宗のもと^{注6)}、国家や貴族の平安を祈願する祈祷中心の仏教となり、国家仏教の性質は残るものの、民衆のための祈祷も行われはじめた。その後、天台宗の中から浄土教の発展をみたことから、仏教が民衆に一步近づいた時代であったともいえる。

鎌倉時代に入ると、民衆の中から仏教を伝える僧侶が多く輩出される。

この中で特筆すべきは「往生要集」を著した源信である。当時の源信の自称名は「天台首楞嚴院沙門源信」という。天台宗総本山の比叡山延暦寺は三塔からなっており、そのひとつである横川の中道が首楞嚴院と呼ばれていた。源信はそこで仏道修行する沙門であった⁷⁾。源信は、「往生要集」を著した目的について、以下のように述べている。

「それ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤、誰か帰せざる者あらん。ただし顕密の教法は、その文、一にあらず。事理の業因、その行これ多し。利智精進の人は、いまだ難しと為さざらんも、予が如き頑魯の者、あに敢えてせんや」⁸⁾。

ここで着目したいのは「道俗貴賤、誰か帰せざる者あらん」の箇所である。つまり、阿弥陀仏の教えと修行には、出家者や在俗者も、高貴な人や貧窮な人も、これを問わず、皆心をかためるであろう、と述べている。仏教が一部の限られた特権階級のものだったのを、明確に庶民をも対象にしている点は仏教史において貴重な時代の転換期といえるだろう。

外来文化である仏教が、庶民にどのくらい浸透していたかを明確に示すことは難しい。庶民の識字率や理解力がどの程度であったかを推し量る材料に乏しく、庶民の生活や心情は歴史の影に埋もれがちである。

その点、大隈和雄⁹⁾は、“古代から説話集や名詩文集が数多く現れたが、中世になるとその記述が漢文から和語や和文へと変わる傾向がみえ”た背景には、“仏教が階級をこえて人々の内奥に浸透し、その心意がもはや漢文では語りつくされなくなったから”だとし、中世の庶民たちが文学や仏教に触れる機会があったことを示唆している。

さらに、中世は乱世とも呼ばれ、慢性的な戦乱状態が続いた時代だが、大隈は、“かえって生産活動の多様さと物資の盛んな流通をもたらし、人的交流が全国規模で盛ん”になり、“中央と地方の文化交流が多面的に発展し、この潮流が仏教教団の動向にも大きな影響をもたらした”とみている⁹⁾。

また、佐々木馨¹⁰⁾によれば、浄土宗を開立した法然の専修念仏にならい、“朝廷・公家をはじめ武士・庶民などの階層が帰依し、道俗に声明念仏の声があふれた”という。

このような先行研究から、少なくとも平安から鎌倉時代にかけて、まずは源信の登場によって庶民の間にも地獄・極楽の概念が広がり、次いで念仏を通して仏教の一面に触れたことから、俗説レベルで断片的でありつつも仏教の漠たるイメージを抱くとともに、庶民が信心の意味を認識していたことを示している。おのずと、自らの病や生死とその意味することについて、何等かの思慮を持つことも十分にあり得たのではないかと考えられる。

② 貴族から武士の時代へ

病草紙が描かれたとされる平安から鎌倉維持代初期の歴史的な出来事を簡略に表にした。(表 2.)

表 2.

	年号（西暦）	出 来 事
平安時代	794	桓武天皇が平城京から平安京に遷都
	801	坂上田村麻呂、蝦夷を降伏させる
	866	藤原良房、皇族以外で、はじめて摂政になる
	887	藤原基経、関白になる 摂関政治の始まり
	894	遣唐使の廃止
	939	平将門の乱・藤原純友の乱、武士の時代へ
	1017	藤原道長、太政大臣に就く
	1086	白河上皇が院政を開始、太政大臣による摂関政治の衰退
	1155	雅仁天皇が後白河上皇になる
	1156	保元の乱
	1159	平治の乱
	1167	平清盛、太政大臣に就く
	1180	源頼朝が挙兵、石橋山合戦（治承・寿永の乱） ^{注8)}
	1185	壇ノ浦の戦いによって平氏が滅亡、鎌倉幕府の成立へ
鎌倉時代	1192	源頼朝、征夷大將軍となる
	1212	源氏および北条氏による執権政治が始まる
	1221	承久の乱

【「わかる歴史年表編集室『一冊でわかる』日本史世界史歴史年表」メイツユニバーサルコンテンツ 2019 年（令和元年）をもとに筆者作成】

1086 年に後白河上皇が院政を開始したことによって摂関政治が終焉し、その後藤原氏を巻き込んだ平氏と源氏のいくたびかの合戦を経て、貴族の時代から武士の時代へと変遷を遂げていく。

病草紙が後白河院の命を受けて作成されたとすれば、そこに描かれる人々はこの激動の時代を生きていたことになる。では、この時代庶民はどんな生活を送っていたのだろうか。その点の足掛かりとして、平安から鎌倉時代に著された鴨長明の「方丈記」とその後に編まれた兼好法師の「徒然草」を参考に読み解いていきたい。

3-2. 中世に生きた人々

鴨長明の「方丈記」¹¹ から、中世は天災と飢饉にまみれた時代といっても過言ではないことが伺える。「方丈記」は 1212 頃、洛南の日野に結んだ小さな庵で、隠者の鴨長明が記したとされる文学作品である。

鴨長明が生きた時代は、前述のような日本史上歴史的な大事件が続いて起こったが、日本が大きな天変地異に見舞われた時代でもあった。大火、辻風（竜巻）、飢饉、大地震が 10

年余りの間に立て続けに起こり、長明はその時の京や人々の様子を細かく記した。長明はこれら4つの天災に遷都を加え「世の不思議」と記している。長明は、平家の福原遷都さえも、庶民にとっては甚だ迷惑な災害だと弾劾する^{注9)}。

例えば1177年に起こった安元の大火。火がたちまちのうちに都に広がる様子や逃げ惑う人々を以下のようにリアルに記した。

「(略) …或は煙にむせびてたうれふし、或は焰にまぐれてたちまちに死ぬ。或は身ひとつからうじてのがるるも、資財を取出るにおよばず、七珍万宝さながら灰燼となりにき。

(略) すべてみやこのうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬるもの数十人。馬牛のたぐひ辺際を知らず」と最終的な被害まで綴っている。他の天災の顛末も同様に、京の混乱ぶりや助けを求める人々、死にゆく人々の様子を克明に描いている。

そこには、歴史的事件に加え、繰り返起こる天変地異に戸惑い、翻弄され、ある者は命を落とし、ある者は住む家を失くし、家族を失って嘆く人々が赤裸々に描かれ、現代においても毎年天災に襲われる我々と何ら変わらぬ日常があったことを思い知らされる。

また、鎌倉時代後期に編まれた兼好法師による「徒然草」¹²⁾にも、歴史的な事件の陰で、日常を営む庶民の姿や心情が垣間見える。例えば、第123段の記述をみても。

「(略) 人の身にやむことを得ずして、いとなむ所、第一に食ふ物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つには過ぎず。飢えず、寒からず、風雨に侵されずして閑に過ぐすを楽しむとす。但し、人皆病あり。病に冒されぬれば、その愁へ忍びかたし。医療を忘るべからず。薬を加へて四つのことを求め得ざるを貧しとす。この四つ欠けざるを富めりとす。この四つのほかを求めいとなむを驕とす。四つのこと儉約ならば、誰の人か足らずとせん」

兼好法師は、衣食住がそろっている上に健康であることが富であるという。医療史を研究する立川昭二¹³⁾は、“飢えと寒さ、そして病、これに侵されなければ富めりとすという一語に、中世の日本人の生き死にの現実がうかがえる”と解釈している。

特に病は、その原因を怨念や疫鬼という目に見えない恐ろしい魔界のモノや仏教的因果応報に求めるしか術がない時代だった。中世の人々にとって、病はある日突然襲い掛かる日常のものであっただろう。加えて、度重なる天変地異は災いであると同時に、やはりこれも日常のものとして受け止めざるを得なかった。身に降りかかる予測不能なありとあらゆる災難に対し、深いあきらめの中でそれでも生き抜いていく力が庶民にはあったのだと考えられる。

「徒然草」の「富」は、極めて簡潔でシンプルな「富」であるが、逆にいえば、その四つさえこの時代の庶民にとっては容易に手には入らないものだった。

富は、生きている時だけに必要なものではない。平安時代、貴族たちが死後立派な葬式を執り行ったのに比べ、庶民の場合はしばしば死体が野外に放置されるのは珍しいことではなかった。特に家族が少なくお金がない場合には、土葬や火葬ができずに野原などに放置する(説話などでは「置く」と表現している)ことが多かった。中世の葬送文化を研究する勝田至¹⁴⁾によれば、死体どころか、人が死にそうになると、死ぬ前に家の外に出すということは古くから行われていた^{注10)}。

平安時代末期に成立した「今昔物語集」には、京の生侍が内野(大内裏の一部が野と化したところ)にあった10歳くらいの死体を河原に持って行って棄てることを強制された

り、病になった童を外に出す説話がみられる¹⁵。中世の人々にとって、町中に病人や死体があることは何ら珍しいことではなく、ごく当たり前の日常の風景として馴染んでいた。病や死は、常に我が身と隣合わせだったのである。

そのような過酷な世を生きていくことための覚悟や心のあり様を支えていたのは、今でいうところの「死生観」そのものだったのではないだろうか。

4. 笑う人々—病草紙の場面から

本論文では、病草紙に描かれる人々に焦点をあて、中世に生きた人々の死生観を推論することを目的とするため、ここでは草紙に描かれる「笑う人々」について論じたい。

病草紙に登場する場面の主人公は、表 1. に掲げたように病を持つ人々である。その病人たちが痛がったり苦しんだりしているのを見て、傍らで笑っている人がある。その笑いはこれまで「嘲笑」と解釈され、病草紙が「猟奇的」「差別的」と評される要因となっている。場面そのものが、病人もそれを笑う人々もひっくるめて「見られる」人々であり、それを「見る」側の存在（後白河院）を論じることで、さらにこの草紙の異色性を浮き彫りにしている。

しかし、彼らの笑いは、そのすべてが差別的な思いから生まれた嘲笑なのだろうか。詞書を読むと「笑いあなづる」、つまり笑い蔑むとあるのは⑬の「背の曲がった男」のみである。背中に虫がいる、という意味で「僵癩（せむし）」と呼ばれた病状を持つ男の、大きく背中が湾曲している様子をふたりの子どもが笑っている場面である。

⑭の「侏儒」には、「おこづき笑ふ」と詞書にある。おこづく、とは調子づくという意味で「おこづき笑ふ」は、調子に乗って笑う、ということだろう。笑っているのは⑬も⑭も子どもであり、遠慮のない笑いは子どもならではの残酷さの表れである。

それ以外の場面においては、なぜ周囲の人々が笑っているかの説明はない。一見、差別的・侮蔑的に笑っているかの様にみえるが、果たしてそれを嘲笑ととらえ、十把一絡げにまとめた解釈をしてもいいのか、という疑問がわく。

中世の庶民は貧しく、政治に翻弄され、天災や病を日常とする日々を送っていた。病や死は現代よりもっと厄介な日常茶飯事な出来事で、かつ身近なものであったろう。その中であって病を得た人を「笑う」という行為はどのような心情を抱えたものであったのか。そこには単に病者を見下す気持ちではなく、末法時代^{註 11}を生きる人々の、生きていくために不可欠な一手段としての行為として捉えることはできないだろうか。そしてその笑いは「死生観」に裏打ちされたものだったのではあるまいか。

以下に、その根拠を求めるために、病草紙の中から、「笑う人々」をピックアップし、その心情を読み解きながら論考を加えていきたい。

4-1. ③「風病の男」

表 1. の③「風病の男」の男は、当時、風病と呼ばれた病のために瞳が常に揺れている男が描かれている。風病は、病の外的要因とされる六淫（風・寒・暑・湿・燥・火）のうち、「風の毒」によって発症すると考えられた。症状は現代の脳血管系の疾患に相当し、目が絶えず揺らぎ、全身から抹消（指先）までが小刻みに無意識に震える様子は、いかにも中枢神経の病を思わせる^{註 12}。女を相手に碁を打とうとしている場面が描かれているが、眼

の焦点があっていないことがおかしいのか、男と相對する女、それを見ている女が実に楽しそうに笑っている。風病は平安時代の貴族にもよく知られた病名であるが、脳神経の病氣という現代医学用語のイメージとは裏腹に、この絵から病の深刻さは全く伝わってこない。男の、必死で困ったような怒ったような表情がひたすら笑いを誘い、見ている者に病の重さを感じさせない。そこには笑うふたりの女の存在が大きい。

瞳が揺らぎ、指が震えても尚、碁を打とうとする（実際に碁盤の上の石はひとつも動いていない）男に対し、同情するわけでもなく、表情のこっけいさに屈託なく笑う女たちの明るい表情は、むしろ病の不都合さを笑い飛ばすユーモアに満ちている。

4-2. ⑦「眼病治療」

表 1. ⑦「眼病治療」は、病草紙の中でも多くの研究者によって取り上げられ多方面からの解説を得ている場面である。

以下に、詞書を全文紹介する。（ ）内は筆者による加筆である。

「近頃、大和国の男が、時々目が見えないことがあると嘆いていた。（おそらく白内障と思われる）ある日のこと、門より男が入ってきて、誰かと聞くと、私は目の病を治すくすし（医者）だという。おお、これは神仏の助けとばかりに呼び入れたところ、くすしは、男の目をひきあげてよくよく診て、針を刺せば良くなると言い、目に針を立てた。すぐにはないがそのうちに良くなると言ってくすしは出ていった。その後ますます目は見えなくなり、ついに片目がつぶれてしまったという」

富士川游¹⁶によれば、はじめて白内障と思しき記述がみられるのは平安朝時代の「医心方」^{注13}においてである。その中に、物が見えづらくなるのは、虚熱と風が原因であり、金鍼で（目を）刺せば、たちまち雲の合間から日がさすように見えるようになる、という記載がある。

現代でも、白内障の治療として、角膜を切開し混濁した水晶体を覆っている膜を残し、水晶体のみを取り除く手術が行われている。「医心方」やこの場面に登場するくすしの行為から、白内障の手術が現代とほぼ同じ原理のもとで行われていたのかもしれないことにまずは驚かされる。

男の左目からは、鮮血がどっと流れ落ちている。次に右目にも針を立てようとする様が描かれている。流れる血液を大きな角皿で受ける女は、ちょっと困ったような顔で笑顔を浮かべる。それを正面から見ている男、奥の襖を半分開いて見る男女らがともに笑っているのがわかる。

これは嘲笑だろうか？

というより、「笑うしかない」場面なのだと筆者は考える。加齢のためか見ることに支障が出始めた男。そこに神のごとく現れた自称くすし。乱暴に見える治療だが、当時は最新の治療法として斬新に映ったかもしれない。一方では、珍しく、本当にそんなことで見えるようになるのかという不安と猜疑心。針を刺された男は、痛みを訴えることもなく、じっと座って右目にも針を立てられるのを待っている。よく見ると、男も笑みを浮かべているようにも見える。画面の左上に、少しだけ顔をのぞかせているやや幼い女がいる。こちらは笑っておらず、心配そうな表情である。痛くても辛くても、目が少しでも見えるようになるなら、という三者三様の思いが伝わってくる。治る期待がなければ、目を刺された

男がじっとしているわけがない。これは現代と同じで、多少の痛みがあっても、病気が治るならという切なる願いで辛い治療を受ける我々の姿でもある。

見ている面々の多くは、深刻な顔をするよりも、興味と怖いもの見たさが共存する思いを抱きながら、「笑うしかない」ようにみえる。ここにも、中世の人々の突き抜けたようなたくましさを感じる。

結果的に男の片目は見えなくなるが、それでも残った片目だけでも見えれば良しとしようと、後に人々は笑い合ったのではないだろうか。そんな風に思わせる場面である。

4-3. ⑩「白子」

病草紙の中には、病を得た者自身が笑っているものがある。表 1. ⑩の「白子」である。

詞書には「白子といふものあり。幼くより髪も眉も皆白く、眼に黒眼もなし。昔より今に至るまで、まゝ、世に出で来ることあり」とある。

画面やや右寄りに、片手に鼓を抱えた白子の女が歩いている。右側には、頭に桶を担ぐ若い女がいる。左側には、烏帽子男と子どもがふたり、さらに立ち止まって白子の女を見ている市女笠の女がいる。烏帽子男がいかにも驚いたように大仰に笑っているが、女ふたりの表情・感情ははっきりしない。少なくとも笑っているようにはみえない。

加須屋誠¹⁶は、この「白子」について、白子の女は“自身の立ち位置を確保”し、“自ら社会との交際を絶ったり、親や家族の手で匿われ隠れて暮らすのではない、独自の生き方を獲得しているように見受けられる”と解釈している。その点、筆者も同感である。

珍しように白子の女に目を留める女たちの視線を受け止めて、白子の女は悠然としている。加須屋誠は、それを“苦しみを表面的な笑いで覆い隠している”¹⁷と述べているが、筆者にはすでに内面の苦しささえとくに克服しているようにみえる。

中世史家、網野善彦¹⁸によれば、中世の芸能民や商人の遍歴(旅)は、日常的にあった。遊女・白拍子などといわれた女性職農民集は、長者に率いられた座的な組織を持ち、京・鎌倉の間を遍歴するとともに、雅楽寮などの内定官司に統括され、宮廷行事に加わっていた。天皇や貴族たちの寵愛を受けた遊女たちも数多く存在し、そのような女性を母に持つことは官位の昇進に何ら影響はなかった。後白河院が、江口遊女の一藤丹波局との間に皇子をもうけていることから、遊女と呼ばれる人々が、皇室との関わりを持つことが珍しくなかった稀有な時代といえる^{注14}。

白子の女は鼓を抱えている。鼓を用いた職業に就き、自ら生活の糧を得、堂々と生きているように思える。当時、鼓は巫女や遊女が打つことが多く、この女ももしかしたら神社か荘園へ出向く途中だったかもしれない。傍らの女たちはその姿に圧倒されているかのようである。

白子は、先天性の白皮症といい、アルビノとも呼ばれる。生まれつきメラニン色素が欠乏する遺伝子病で、人のみならず広く動物界で認められる事象である。白子は、多くの人と異なっているとはいえ、日常生活に支障が出るような障害とは違う。古代から中世にかけては、自分とは異なる存在を異質と捉え排除するというより、むしろこの世のものではないものに対する畏怖の思いを持つこともあった。白子の白さは、見る者にとっては神々しささえ漂うものだったかもしれない。病草紙に描かれる白子の女には、人々からの奇異な視線を軽やかに流し、超然と生きる清々しささえ感じられる。

故に、端で大笑いする烏帽子男は軽薄で無慈悲なつまらない人間、つまり白子の女に対する世俗性の象徴である。見方によっては、烏帽子男は白子の女にかなわない、そう自ら白状しているようにもみえるのである。

4-4. ①「鼻黒の男」

さて、筆者が病草紙の中で、最も好ましく思うのは「鼻黒の男」である。

登場人物は4人。鼻黒の男は、団扇を持ち隣の女に何がしか不満を述べている。それは今日一日の仕事にまつわることではなかろうか。部屋には弓矢があり、腰には刀を差している。仕事を終えてくつろぐ男に寄り添って、幼子に乳を含ませながら耳を傾ける妻。妻の顔はふっくらとして若々しい。頬はほの赤く、乳はたおやかに張っている。男と妻の前には駒で遊ぶふたりの子どもがいる。男とこのふたりの子、そして乳を飲む赤子の鼻先は黒く墨を塗ったようである。

皮膚が一部黒くなるのは、現代でいえば悪性黒色腫（メラノーマ）^{注15}だが、これほど大きいのは稀であるし遺伝性はない。とすると、この鼻黒は想像上の病か単なる痣かもしれない。いずれにしろ見た目は良いとはいえない。しかし、男・子どもはそれを気に病む風でもない。妻もまた、おおらかに構えているようにみえる。妻の頬の赤さは、鼻黒と対比させるとより一層の健康と健全さの象徴として描かれる。

妻は笑ってはいないが、その表情は穏やかで幸せに満ちている。見た目の悪い病を抱えた夫と子どもたちを丸ごと受け止め、淡々と子育てをする母の姿そのものである。

病草紙が描かれた理由をはっきりとしないが、この「鼻黒の男」には、病を日常のものとする中世の人々や家族の日常がある。他の病に比べると、家族全員で病を受け止めている様が描かれ、好ましく、また妻であり母である女性の精神性の強さを表している。

作家の北村薫¹⁹は、著書「詩歌の待ち伏せ」の中で、「嘲笑とは(人)最も遠い心の持ち方をした時に示すものである」と綴っている。鼻黒の男の妻は、嘲笑から一番遠い場所に身を置き、見栄えの良くない家族を心から慈しんでいるのが伝わってくる。

先の、「白子」における「白子の女とそれを笑う男」や、「鼻黒の男」の「父子と彼らを見守る男の妻」、それぞれの対比は死生観に男女差があるのが伺える。ジェンダーに焦点をあてた死生観については、今後の課題として他の絵巻も引用しつつ論考を深めていきたい。

5. 死生観を考える

5-1. 古代・中世の人々の死生観

死生観という概念を最初に世に知らしめたのは、明治から昭和までを生きた仏教家であり作家の加藤咄堂といわれる。その著「死生観」では、世界の死生観を俯瞰し、かつ武士道の価値観を根底にした日本人の死生観を説いている。

加藤咄堂²⁰は、著書の冒頭に、死生は“人生の根本問題にして一切の科学一切の哲学は基礎を其の上に築き、一切の宗教一切の道徳は根底を其の上に置く”と述べる。まさしく、歴史は流れても、人々の根本問題に常に死生はある。

死生観の言葉はなくても、古代から現代にいたるまで、我々は常に死生と向きあってきた。

先史学者である山田康弘²¹は、縄文時代の墓が住居の近くにあったり、あるいは住居の内部に遺体が埋葬されていた事実を検証し、縄文人たちが人の死を自分たちの生活から隔

絶したもの、特別なものとしてとらえていたのではなく、身近な存在として考えていた傍証だとする。

また、縄文人たちは、死を怖がりいたずらに遠ざけていたのでもない、とも説く。それは、古代から中世、近世、そして現代にいたるまで脈々と我々日本人に受け継がれてきたものと考えていいだろう。むしろ稀にみる高齢社会を迎えて、現代における我々が一番死を遠ざけており、死をただ怖いとしか思わない状況に身を置いているのかもしれない。

鴨長明の方丈記の冒頭は、“ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず”から始まる。長明は川の流れを見つめて世の無常を悟ったと解されているが、立川昭二²²は、“そこに日本人の人生観あるいは歴史観の核のようなものが言い表されている”といい、“歴史観は日本人の死生観にも通じる”、と述べている。

吉田兼好は、徒然草 155 段に、「…死は、前よりしも来らず。かねて後に迫れり。人皆死あることを知りて、待つこと、しかも急ならざるに、覚えずして来る」と著した。

日常、死を意識することは少ない。しかし、死はいつもすぐ後ろにじっと潜み、我々の思いとは無関係にある日突然やって来る。そう説いているのだ。

中世の病草紙に描かれた人々は、おのずと病や死と隣り合わせであり、それを知っていたからこそ、病を得た人を笑うことで、死を恐れず明日は我が身と思い、日々を流れるように生きていたのではないか。

乱世・末代に生きる中世人にとって、笑いは死生観に裏付けられた、生きていく術であったと思われてならない。

5-2. 笑うということ―「にもかかわらず笑うこと」

「ユーモアとは、『にもかかわらず』笑うことである」という言葉を紹介したのは日本に死生学を定着させたドイツ人、アルフォンス・デーケン²³である。彼によると、ドイツで一番有名なユーモアの定義だという。“自分は今、苦しんでいます。しかし、それ『にもかかわらず』相手に対する思いやりとして笑顔を示します、という意味であり、これが真に深みのあるユーモアだという。

筆者は、この言葉と病草紙に描かれる人々から漂う死生観には共通するものがあることを思う。原因がわからず、時に滑稽にもみえる病を得たとき、あるいはそういう人々に接したときに、「にもかかわらず笑うこと」しかなかったという現実。

笑う者も笑われる者も、どこか物哀しく、見ようによっては笑う＝病者を蔑んでいるようでもあるが、蔑みではなく、理不尽に襲ってくる病や明日にもやって来る死と向き合う彼らなりのユーモアであり、生きる知恵であったろう。

アルフォンス・デーケンは、ユーモアという言葉はラテン語の「液体」が語源だという。“ヨーロッパ中世の医学者たちは、人体を構成する液体を一括して「フモーレス（フモールの複数形）」と称し、これこそが人間を生かしているのだと考えた”²³。今や、ユーモアを体液と捉えるのはいささか無理があるが、それでも人間の生命の源である点において、その意味は少しも色あせていない。

さらに、“ユーモアによって生み出されるのは「穏やかな笑い」”だと指摘する。その意味を真に理解し実践できる者は、病や死をむやみに恐れることなく、死を前提にして笑う。そして生きていくのだと、デーケンは言う²⁴。

5-3. 現代人の死生観

翻って、現代に生きる我々はどうか。

国語辞書を紐解くと、死生観とは“命ある限りは充実した毎日を送ろうという考え方”“人生の終末としての死についての、その人の考え方”²⁵とある。

文字をなぞらえれば、死ぬこと生きることに対するその人の思い、考え、というところだろうか。

死生観という言葉が声高に口にしなくても、我々はおのずと生や死を考えている。特に年齢を経て、肉親や親しい人の死に遭遇することが増えると、誰にでも死が平等に訪れることを頭と心で理解するようになる。

一方で、医学の進歩や生活環境の改善によって、日本は昭和に入って劇的に寿命を延ばし、世界でも名だたる長寿国となった。たいていの病気は「治る」のだという経験則が増えるにつれ、皮肉なことに、死は遠い存在になった。おのずと死を語ることがタブー化され、死生学という学問の中でしか、死や生を深く語る機会はなくなっていった。

生きているうちに一番死を意識するのは、肉親の死であったり葬儀の際であったり、非日常の、限られた時間の中でのことであるが、最近は葬式の簡略化が進み、墓じまいという言葉さえ耳にする。死を意識する貴重な時間が崩れるようにして失われていくのをひしひしと感じる昨今である。

しかし、果たしてそれでいいのだろうか。

死を考えなくなったことで、我々は逆に人間として弱く脆くなっているのではないか。社会がスピーディに効率化されることで、大切なものを見落とし、結果として人間そのものが後退しているのではあるまいか。

病草紙が編まれた中世は、仏教の伝来、武士の台頭という、大きな転換期を迎えた時代であった。加えて度重なる天災に襲われ、まさに乱世であり末代といわれた頃である。疫病や死は隣合わせであり、実際死体は町中にごろごろ転がっていた。今から考えればそれは地獄絵であったが、中世の人々はその中で生きていかねばならなかったのである。

病草紙には、病者や障害者を笑う人々、また笑われる人々が描かれるが、両者とも笑うことしか他に解決策を持たなかったのではないか。そして、その笑いは、中世の庶民に急速に普及した仏教、特に地獄のイメージを具体化し、病や死を因果応報の観点から説く新しい精神革命のもとに、死や病に対する恐れを抱きつつ、それでも生き抜いていかねばならない運命を受け入れるしたたかさに支えられていたのではないだろうか。

逆に今我々に足りないのは、そのユーモア、笑いではないか。

病草紙を紐解き、病を笑い笑われる人々を見ていると、死生観を置き去りにした現代人が中世の人々から学ぶことが多々あることを強く思うのである。

6. 終わりに

中世は、数多くの絵巻物が編まれた時代である。

その中で、病草紙は当時の病を描くことに特化した絵巻物として、多分野の研究対象になってきた。今回、病草紙に描かれる人々に焦点を絞り、病者や病者を見る者の笑いから、彼らの死生観を浮き彫りにする試みに挑戦した。

しかし、そもそも病草紙の絵画は平安末期の現実ではないという指摘がある。それゆえに、ここにある場面を、劇場空間における舞台設定と置きかえ、絵の構図、線描の質、建築モチーフの有無、同時期に編まれた他の絵巻物との相互性などを研究テーマとして論考するものが多く見受けられる。

筆者は、描かれた人々は、すべてが架空の設定だったわけではなく、少なくとも当時の時代や生活、病との向き合い方において、庶民の現実の姿を反映させていることを前提に考察を試みた。これまで、病者を「嘲笑する」と捉える研究者がほとんどだったのを、場面によってはその笑いはユーモアであり、現代でいうところの死生観に導かれた笑いであることについて、中世という時代背景、同時期に書かれた文学作品などを引用することでその可能性を追求した。

そこには、死生観という哲学的用語を知らなくとも死や病の中で生きている中世の人々から、死を忘れてしまいがちな現代人が学ぶべきことを探りたい、という思い。死を遠ざけてしまったかのような現代人の生き方に警鐘を鳴らしたい、との願い。そんな筆者の心情がある。

病草紙の一場面一場面から、現代へと続く歴史のつながりや綿々と流れゆく時代を感じることができる。中世の人々の息づくような生活や苦しみ、おかしみをさらに深く読み取ることで、彼らの笑いやユーモアを根底にした生死への姿勢を声なき声として拾い上げ、我々の死生観に生かしていきたいと思う。

注

-
- 注 1) 院政時代の代表的絵巻として、「源氏物語絵巻」「伴大納言絵巻」「信貴山縁起絵巻」「鳥獣人物戯画」など国宝の4大絵巻と称されるものがある他、仏教関連の絵巻物が多数編まれた時代である。
- 注 2) 後白河天皇のこと。鳥羽天皇の第四皇子として生まれ、譲位後は34年もの長い期間院政を布いた。院政とは天皇（譲位後の天皇）や法皇（出家した天皇）となって実権を握り、国を治めた政治形態。
- 注 3) 浄土宗大辞典によれば「正法念処経」は、元魏・般若流支訳。原典の成立は四、五世紀ごろ。経名に「念処」とあるように、内観を通して三界六道の因果を詳しく説いている。
- 注 4) 関谷家は、1644年質屋を端に豪商となった名古屋の名家。1868年には尾張藩の御用達名簿の筆頭となる。美術品の蒐集にも熱心で、「病草紙」の多くを所有していた。
- 注 5) 軸装とは、紙や布にかかれた書画を掛け軸の形に仕上げること。卷子装は巻物、台紙貼は、和紙を台紙に貼ったもの。
- 注 6) 国家や貴族が求めていたのは加持祈祷だったが、最澄にはそれが欠けていたことを思い、最澄の後継者たち（円仁・円珍・安然）が天台宗の密教化を図った。
- 注 7) 沙門は、古代インドにおける男性修行者のこと。古い仏教ではない、新しい思想運動の実践者を意味する。
- 注 8) 俗にいう「源平合戦」のこと。
- 注 9) もともと福原に住んでいた人々は土地を奪われ、京から移り住む人も新居のために膨大な負担を負うこととなった。それまでの家屋を壊し、材木を淀川に流して運ぼうとしたために、京は荒れ果て、新都はなかなかできなかったと伝えられる。
- 注 10) 1102年、高陽院で摂関家の当主である藤原忠実が板敷の下に子どものちぎれた足を見つけた。以後、高陽院以外の邸にも死体の一部が投げ込まれる事件はしばしばあった。行き倒れの死者や孤独

な貧者、僧までも死後に遺棄されることは平安時代にはかなり普通にみられた。

注 11) 三時説では、正法は仏滅後千年間の時代、仏の教えと修行と悟りが備わっている。像法は、次の千年で、教えと修行はあるが悟りが無い。末法はその後 1 万年。教えのみあり、修行と悟りは無いと伝わり、平安時代は、末法時代に相当する。

注 12) 風病は、脳血管疾患のことといわれるが、症状から推測するに、パーキンソン病である可能性も高い。

注 13) 「医心方」は、丹波康頼の撰述による日本最古の医学書。おもに隋の「病原候論」を参照に、本草・薬性・鍼灸・養生・服石・房内・食餌等について記載されている。全 30 巻から成る。

注 14) 鎌倉時代までの遊女・傀儡(くぐつ)・白拍子の社会的地位は低くはなく、天皇・貴族の子どもを産み、勅撰和歌集にもその和歌を採られた人がいたことはよく知られている。その後、室町・戦国時代に天皇や神仏の権威は無残に低落していくこととなり、それにつれ、遊女や巫女など「聖なるもの」に依存するところが大きかった芸能民、宗教民、職能民の女性たちの姿はほとんど消えていった。

注 15) 皮膚がんの一種でメラニンを作る色素細胞ががん化したものと考えられている。日本人では、手や足の裏、手足の爪に認めることが多い。初期は直径が 2~3 mm 程度だが、徐々に 6 mm くらいになることもある。家族内発生は日本ではほとんどない。

引用文献

1. 山本聡美 「九相図をよむ」 角川選書 2015 年(平成 27 年)
2. 服部敏良 「王朝貴族の病状診断」 吉川弘文館 2006 年(平成 18 年)
3. 加須屋誠・山本聡美編 「病草紙」 中央公論美術出版 2017 年(平成 29 年)
4. 加須屋誠「論考」 加須屋誠・山本聡美編 「病草紙」 中央美術出版 2017 年(平成 29 年) p.106
5. 吉田唯 「中世文学に見るカミの享受」 龍谷大学学位請求論文 2012 年(平成 24 年度)
<http://echolab.ddo.jp/Libraries/%E9%BE%8D%E8%B0%B7%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E5%AD%A6%E4%BD%8D%E8%AB%8B%E6%B1%82%E8%AB%96%E6%96%87/%e9%be%8d%e8%b0%b7%e5%a4%a7%e5%ad%a6%e5%ad%a6%e4%bd%8d%e8%ab%8b%e6%b1%82%e8%ab%96%e6%96%872013.09.19%e3%80%80%e5%90%89%e7%94%b0,%20%e5%94%af%e3%80%8c%e4%b8%ad%e4%b8%96%e6%96%87%e5%ad%a6%e3%81%ab%e8%a6%8b%e3%82%89%e3%82%8c%e3%82%8b%e3%82%ab%e3%83%9f%e3%81%ae%e4%ba%ab%e5%8f%97%e3%80%8d.pdf> (2020 年 12 月 31 日アクセス)
6. 山本聡美「病草紙」と経説 加須屋誠・山本聡美編 「病草紙」 中央美術出版 2017 年(平成 29 年) p.173
7. 小山聡子 「『病草紙』製作と後白河法皇の思想」 日本医史学雑誌 51(4) 2005 年(平成 17 年) p.610
8. 中村元 「往生要集を読む」 講談社 2017 年(平成 29 年)
9. 大隈和雄/中尾堯編「日本仏教史 中世」 吉川弘文館 1998 年(平成 10 年) p.11
10. 佐々木馨 「生と死の日本思想・現代の死生観と中世仏教の思想」 吉川弘文館 2006 年(平成 18 年) p.83

11. 小林一彦 「方丈記 鴨長明」 100 分で名著ボックス NHK 出版 2019 年（平成 31 年）
12. 小川剛性訳注 「兼好法師 徒然草」 第 27 版 P.22 角川ソフィア文庫 2020 年（令和 2 年）
13. 立川昭二 「日本人の死生観」 ちくま学芸文庫 2018 年（平成 30 年） p.72
14. 勝田至 「死者たちの中世」 吉川弘文館 2003 年（平雄政 15 年）
15. 由良弥生 「眠れないほど面白い『今昔物語』」 三笠書房 2014 年（平成 26 年）
16. 小川鼎三校注 富士川游 「日本医学誌綱要 1」（富士川游「日本医学史」明治 37 年発行の復刻版） 平凡社 1989 年（昭和 64 年）
17. 加須屋誠「論考」 加須屋誠・山本聡美編 「病草紙」 中央美術出版 2017 年（平成 29 年） p.156
18. 網野善彦 「中世の非人と遊女」 講談社学術文庫 2018 年（平成 30 年）
19. 北村薫 「詩歌の待ち伏せ」 筑摩書房 2020 年（令和 1 年） p.79
20. 加藤咄堂 「大死生観」 明治 41 年復刊版 史籍出版 1982 年（昭和 57 年） p.6
21. 山田康弘 「縄文人の死生観」 角川ソフィア文庫 2018 年（平成 30 年）
22. 立川昭二 「日本人の死生観」 ちくま学芸文庫 2018 年（平成 30 年） p.47
23. アルフォンス・デーケン 「よく生きよく笑いよき死と出会う」 新潮社 2017 年（平成 29 年）
24. アルフォンス・デーケン 「よく生きよく笑いよき死と出会う」 新潮社 2017 年（平成 29 年） p.192
25. 山田忠雄ら編 「新明解国語辞典」 第 7 版 三省堂 2016 年（平成 28 年） p.631

植田 美津恵（うえだ みつえ） 東京通信大学 人間福祉学部 准教授

